

志賀直哉〈山科もの〉の主題

—作家の創作意図から—

角 美樹*

目 次

- I. 〈山科もの〉の位置と問題提起
 - II. 「家庭」に関して
 - III. 事件以前の「彼」と「妻」
 - IV. 「彼」の恋愛と「彼」
 - V. 「妻」の変容と「彼」
 - VI. まとめ
-

I. 〈山科もの〉の位置と問題提起

志賀直哉の短篇に〈山科もの〉と呼ばれる一群の作品がある。大正12年、『暗夜行路』後編の執筆に行き詰まっていた志賀は、心機一転の意味もあってか、大正4年以来、武者小路実篤・柳宗悦・バーナード・リーチらと近隣に住み、白樺コロニーの観を呈していた千葉県我孫子を離れ、3月に京都栗田口三条坊に転居する。我孫子に比べ、便利なところだったが、そのために客が多くて落ち着いて仕事ができないと、同年10月、山科村竹鼻に居を移した。この山科時代の1925年、直哉43歳の時、祇園花見小路の茶屋の仲居との関係のために、妻康子との間に悶着が起った。この出来事を材として、次の4作品が書かれた。

『瑣事』 大正14年9月「改造」（大正14年5月執筆）

『山科の記憶』 大正15年1月「改造」（大正14年12月執筆）

*韓南大 専任講師 日本近代文学専攻

『痴情』	大正15年4月「改造」（大正15年3月執筆）
『晩秋』	大正15年9月「文芸春秋」（大正15年7月執筆）

これらを一連の作品と見ることは、後に掲げる作家自身の発言からも妥当性を持つと思われる。〈山科もの〉の呼称は便宜的なものではあるが、以下、その通称に拠りたい。

この〈山科もの〉は、作家の実体験、しかも、有り体に言えば浮気という個人の内面に深く関わる事柄に取材していることもあって、平野謙「私小説の二律背反」¹⁾では、私小説における芸術と実生活との二律背反の問題を追求するために取り上げられ、作品の読み方の一つの方向性が与えられた。中村光夫『志賀直哉論』は、この4作品の丁寧な読解を行って、後の〈山科もの〉研究に多大な示唆を与えたが、「主人公を志賀直哉とみとめると、それは主人公の生活の危機を表はしながら作者の芸術の危機を体現するといふ二重の機能を発揮する」²⁾と述べて、この事件が志賀の作家活動に及ぼした結果について論じている。このように〈山科もの〉は早くから取り上げられたが、これらの著作で論点となったのは、事件が志賀の作家活動にどのような影響を及ぼし、どのような結果をもたらしたか、ということであった。このテーマは引き続き主要な論点となっている。もう一つ論点となったのが、主人公「彼」あるいは志賀と妻との争いの決着の仕方についてである。平野は、「絶対専制主たるこの作者といえども、この場合にかぎり細君の哀訴のまゝに屈服せざるを得」³⁾と、中村は「この連作に描かれてゐるいきさつは、妻の夫に対する完全な勝利を示して」⁴⁾いると言う。両氏によって〈山科もの〉研究の基本的姿勢、方向性が示されたと言ってよいが、以降、〈山科もの〉への論究は必ずしも多くない。

高田瑞穂「『山科の記憶』一系の作品について」⁵⁾では、描かれた出来事の時期を考証し、事件の顛末を辿る。そして、材料から見ると、「壮年期の試行錯誤の記録」と言ってよく、「彼」と「妻」との争いの決着については、「『彼』は、結局思い通りの行為をやり通した」と見、「その出来事は、かえつて『彼』とその妻との結びつきを深くした。一の人間的開眼が、夫妻のそれぞれの中に生れたからであつたにちがいない。」と言う。国松昭「『山科』ものについて」⁶⁾は、「この事件ないし〈文学的恋愛〉の彼自身の総括は、大正十五年一月九日の日記の」、「妻子を可愛がろう 溺れないで愛しよう あとで不愉快になる事はなるべくしないようにすべし」に尽きる、と言う。「志賀は、彼の創作

1) 平野謙「私小説の二律背反」、『平野謙全集 第二巻』所収、新潮社、1975.2。

2) 中村光夫『志賀直哉論』、「山科の記憶」、文芸春秋新社、1954.4、157頁。

旧字体を新字体に改めた。以下、同じ。

3) 平野謙、前掲書、注1と同じ、153頁。

4) 中村光夫、前掲書、注2と同じ、181頁。

5) 高田瑞穂「『山科の記憶』一系の作品」、「国語と国文学」第48上、1971.6、12頁。

6) 国松昭「『山科』ものについて」、「一冊の講座 志賀直哉」、有精堂、1982.10、113頁—124頁。

欲に〈生气〉をもたらすこの事件を、注意深く、かつ自然に〈無理往生〉させて、実生活を守る道を選んだ」ので、「中途半端」で「物足りぬ作品群」で、「不完全燃焼」であることから『邦子』が書かれたと考えられるかもしれない、と述べている。中村智「志賀直哉「山科もの」論」⁷⁾では、「同時期の志賀文学の文脈を「山科もの」の理解によって明らかに」しようとする。「志賀は〈他者〉との衝突やそこから生じる停滞をどう解消すべきかということを考えつづけた作家」で、「対女性（対妻）の問題を扱った作品」、「『范の犯罪』・『好人物の夫婦』・『転生』などが書かれるが、「やがて志賀は創作を通してではなく、浮気をめぐる衝突という形で、現実において〈他者〉（的存在）としての妻と自ら対峙しなければならなくな」り、その体験を題材に、「対女性ないし対妻、ひいては対〈他者〉の問題を創作を通して掘り下げようとしたのが「山科もの」」だと言う。そして、妻との対決色は徐々に希薄になって、『晩秋』では「むしろ努めて対立を避け」、衝突回避を自らの主体的選択として行い、「妻ならびに家族を守っていくという「彼」の指針が再度確認される形で結ばれるのである。」と述べる。

ところで、〈山科もの〉について、志賀自身が『続創作余談』で次のように述べている。

「山科の記憶」「痴情」「晩秋」「瑣事」此一連の材料は私には稀有のものであるが、これをまともに扱ふ興味はなく、此事が如何に家庭に反映したかといふ方に本気なものが、その方に心を惹かれて書いた。「山科の記憶」と「痴情」には今も或る愛着を持つてゐる。／「邦子」は前の材料での心的経験を素に、存分に作った小説。或る程度に打込んで書く事が出来た⁸⁾。

この発言について、中村光夫は前掲書において、「僕らにとつて興味があるのは、「此事」の「家庭への反映」より、むしろそれが彼の芸術家としての内生活にどのやうな影響を及ぼしたかといふことです。」⁹⁾とっていて、これが、〈山科もの〉研究の基本姿勢となったこと、前述したとおりである。この『続創作余談』で作家が言う、この事件に関わる「心的経験」は後の『邦子』を作る「素」となり、そうした夫婦の問題が『暗夜行路』に流れ込んでいることは容易に想像されることから、〈山科もの〉事件を志賀の創作活動上の重要なポイントと位置付けることは首肯される。しかし、この「心的経験」がどのようなものであったのかということについて、〈山科もの〉の作品世界そのものに即した検証があつてしかるべきではないか。作家は、「山科の記憶」と「痴情」には今も或る愛着を持つてゐる。」と言う。この発言から、作家自身がこれらの作品について十分に書き得

7) 中村智「志賀直哉「山科もの」論」、「山口国文」第18号、1995.3、21頁－32頁。

8) 『続創作余談』、『志賀直哉全集』第8巻、岩波書店、22頁。旧字体は新字体に改めた。

9) 中村光夫、前掲書、注2と同じ、167頁。

たという評価を与えているものと考えられる。このような視点から、この〈山科もの〉で作家が主題とした、「此事が如何に家庭に反映したか」を、作品に即して具体的に読み解いていくのが本稿の目的である。

なお、引用は『志賀直哉全集』（岩波書店、1973）に拠った。旧字体は新字体に改め、（ ）内に作品名と全集による頁数を示した。

Ⅱ．「家庭」に関して

キーワードと見做される「家庭」の語は、作品本文中に実はわずかで、それらの例からだけで作家の家庭観を探ることは難しい。では、志賀がこの〈山科もの〉で「家庭」と捉えたものは何だったのか。その手がかりを得るために、家庭の構成員である家族について概観してみたい。登場する家族は、妻と子供、東京に住む父母である。これらの人々の登場場面を辿っていくと、〈山科もの〉の作品のあらましが浮かび上がってくる。

① 妻

第 1 作『瑣事』は、奈良に住む「彼」が「女」に逢うために京都に行くが、「女」が客と一緒に奈良へ出かけたために行き違いとなり、また、奈良へ帰ってきて、「女」とすれ違って、それで満足し、おかしいほど快活な気分になる、という話である。その冒頭は次のように書き出される。

京都まで金を取りに行く、一さう家には云つてある。が、それは嘘だ。／奈良の銀行に金は来てゐる。然しさう云つて京都へ行く口実を彼は作らねばならなかつた。一京都には妻に隠れて会ひたい人間がゐた。
(『瑣事』、283頁)

「京都には妻に隠れて会ひたい人間がゐた。」—これが、この事件の要点そのものである。その「女」のために、「家」に嘘を言う、つまり、「家」を欺いているのである。『瑣事』では「妻」は、語としてもこの一箇所に見えるだけだが、この冒頭で、事件と「妻」との関係も簡潔に示されるのである。

第 2 作『山科の記憶』は、時間的には第 1 作『瑣事』より遡る。「女」に送らせて山科に帰ってきた「彼」に対して、「女」の存在を知った「妻」は詰問し、終に女と別れることを承知させる。この冒頭近くで「彼」にとっての「妻」と「女」との関係が示される。

彼は妻を愛した。他の女を愛し始めても、妻に対する愛情は変らなかつた。然し妻以外
の女を愛するといふ事は彼では甚だ稀有な事であつた。
(『山科の記憶』一、295頁)

この2作において、「妻」の存在を軸として事件の概要が示されることは象徴的である。つまり、〈山科もの〉事件は「彼」と「女」の恋愛だが、作品の主題は「妻」の側—すなわち、「家庭」内にあるのである。「彼」と「妻」との関係については、次項で詳述する。

② 母

母は東京に住み、『痴情』と『晩秋』に登場する。

第3作『痴情』は、『山科の記憶』の翌日の雪の日に始まる。「女」を思い切れないでぐずぐずする「彼」に対して、「妻」は執拗に言い張って二人して京都に出かけ、「彼」は別れる気になれないまま「女」に別れを告げる。「妻」は風邪をこじらせ衰弱する。その後、所用で東京に出かけた「彼」に、「妻」が辛抱の頂点で書いた手紙が届くが、その手紙を見ている時に「妻」から「オカヘリネガウ」（『痴情』四、318頁）の電報が届き、「母」が「妻」の病気を心配する。「彼」の「私が道楽したんです」（『痴情』四、318頁）という告白に、「直ぐ帰るといいね」（『痴情』四、318頁）と、「妻」への理解を示す様子が描かれる。「母」は、第4作『晩秋』の結末部の「彼」と「妻」の会話中にもう一度出てくる。そこでは、事件のことについて「妻」が「私お母様ならお話してもいいけど」（『晩秋』四、336頁）と言い、「妻」にとって心許せる人として点描され、『痴情』結末部の、「妻」を理解し心配する「母」と呼応する。このように「母」は「妻」にとっての心強い理解者である。そして、この出来事が夫と妻の争いに止まらず、家庭の心配事であることを示すこととなっている。

③ 父

第4作『晩秋』は、妹の結婚の披露に立ち会うため上京する「彼」一家が、京都の停車場へ出る。汽車の時間まで3時間近く、「彼」は友人からの誘いで花見小路へ出向き、「女」と再会する。その間、妻「郁子」は、「彼」の裏切りを知って夫婦のことを心配する知人と気苦労な時間を過ごすのだが、「彼」と「女」と別れたとした後も、「妻」を欺いていたことを郁子や知人に知らしめたのが、第1作『瑣事』の発表であった。その『瑣事』公表の経緯の挿入が『晩秋』の中間部分を占めるが、そこで「父」の存在が大きな意味を持つ。

三月程前東京から老父が丁度暑中休暇になつた彼の小さい妹二人を連れ、初めての男の兄の孫を見る為め奈良に遊びに来た。彼はそれまでに雑誌社と約束の仕事を片づけて置くつもりだつたが、却々出来ず、父達が来て既に締切日も過ぎ、毎日のやうに催促されたが、まだ出来なかつた。（略）老父は気にして自分達が来た為め、仕事が出来なくては気の毒だと思ふらしかつた。然し彼にすれば気の毒がらしては気の毒だと思ふのであつた。（『晩秋』二、324頁）

「彼」は書けないのは「父達が居るからではなく、毎時の事なのだ」（『晩秋』二、325頁）と言うが、締切を引っ張ったために雑誌社の方を断る事もできず、「遂に出来なかつたと云ふのは父にも何か気の毒な気がし」（『晩秋』二、325頁）て、以前に書かれながら出さずにおかれていた『瑣事』が雑誌社に渡されたのである。出した後で郁子が、「お父様が気にいらつしやるやうで気が気おやなかつた」（『晩秋』二、327頁）と言い、皆のいる茶の間へ「小説首尾よく出来上りましたさうで、どうぞ御安心遊ばして……」（『晩秋』二、327頁）と上機嫌で伝える様子から、『瑣事』の公表には、父の滞在が大きな要件となっていたと考えなければならない。事件の上では『痴情』と『晩秋』の間に位置する『瑣事』の出版は、この出来事の重要な転換点であった。

④ 子供たち

子供たちは第 4 作『晩秋』の冒頭と最終章に登場する。冒頭は次のようである。

その年の五月に生れた赤児は白い毛糸の肩掛から一寸頭を見せ、女中の胸でよく眠入つて居る。三人の女の児達は久しぶりの上京の嬉しさからしきりにはしやぎ、待合室のソファからソファと移り歩き、人中を関はず遠くから「お母様。お母様」と呼びかけた。（略）井浪の女将は郁子をその子供時代から知つてゐた。その郁子が今は四人の子供を引き連れてゐる。それが可笑しいといつて笑つた。（『晩秋』一、321頁）

この描写で浮き彫りにされるのは、むしろ、母「郁子」である。その子供時代から知っている女将を通して、かつてのお嬢さん郁子が、今は 4 人の子供の母であることが印象づけられる。また、はしゃぐ子供たちの「お母様。お母様」と呼ぶ声も、「妻」の母である側面を強調している。最終章では、寝台車の中でわがままを言う子供たちに対する母の姿が、あたかも呼応するように描かれる。

お母様、お母様、お姉ちゃん、時やと代つて貰つて上へ一人で寝ちやあいけない？ええ、いけない？／「いけません」／「千鶴子、一人で下に寝るう」二番目がいつた。／「皆、そんな勝手な事いつちや、いや。そんな事をいふ人は奈良へ還して一人でお留守番させることよ」郁子は苛々して居た。（『晩秋』四、334頁－335頁）

このように、子供たちの存在は、「妻」の母としての姿を見せる鏡である。「妻」に母である姿が立ち現れてくるのは、『痴情』末尾の「妻」の手紙の中に子供の消息が伝えられるところからであるが、『晩秋』に至って、「郁子」の母である側面は確固としてくる。

「彼」と「妻」とを中心に運ばれてきた作品世界が、『痴情』末尾に「母」へと拡がり、『晩秋』では「父」に関わって大きく転換し、また、妻、郁子の母としての姿が浮かび上がって、家族としての縦横のつながりを示してくるのである。家族の輪郭が作品の構

造に強い連絡を持っていることは前に見た通りであるが、出来事についてもさまざまに関与していることが確かめられたと思う。事件に主体性を持って関わるのは、言うまでもなく「彼」と「妻」だが、作品内では「夫婦」の語は用いられていない。このことは、作家がこの事件を夫婦の問題として捉えていないことを端的に表すのではないか。つまり、志賀は、「彼」と「妻」を、他の家族と緊密につながって家庭を構成し、その中心となって主体性を持つ存在と捉えていると考えられる。これが『続創作余談』で「家庭」の語を用いる意味だと考えたい。

『晩秋』で、『瑣事』公表に際して「彼」は「家庭に波瀾を起してまで出すのは馬鹿々々しい」（『晩秋』二、325頁）と言う。この「家庭」を少しく検討すると、雑誌社に出した後、「郁子が独り苦しむのを見るのは堪へられぬ」（『晩秋』二、328頁）と思ひ、郁子に「見ない方がいいよ」（『晩秋』二、327頁）と気遣って、その他にも郁子が一切触れないようにひたすら方策を尽くすのは、この「家庭」が実質として郁子を指していることを示している。しかし、それを男女の問題、夫婦の問題としてではなく、家庭の問題として捉えるというのが作家の意図なのである。

以上のように「家庭」を捉えるなら、〈此事の家庭への反映〉を、「妻」に焦点を置いて「彼」と「妻」との関係を見ていくことが有効であろう。また、「彼」の恋愛がどのようなものであったのかも、〈此事〉の内容として重要である。このような整理のもとに、作品世界の展開に沿って、以下、事件以前の「彼」と「妻」のありよう、「彼」の恋愛の内実、事件以降の「妻」と分けて、その様相を読み取っていくこととする。

Ⅲ． 事件以前の「彼」と「妻」

〈山科もの〉のうち、時間的に最も先を描くのは『山科の記憶』で、「妻」が「女」の存在を知ったところから始まる。従って、事件以前を描く作品はないのだが、叙述のそこそこに事件以前の「彼」と「妻」を読み取ることができる。この項では、そのような叙述を拾いながら、事件以前の「彼」と「妻」の関係がどのようなものであったのかをまとめていきたい。

まず、『山科の記憶』の初めに、「彼は妻を愛した。他の女を愛し始めても、妻に対する愛情は変らなかつた。」とあり、これは、作品全体に通底する「彼」の基本的な姿勢である。続いて、女のことを知った「妻」が次のように描写される。

部屋の隅に恰も投げ出された襦袢のやうに不規則な形をして、妻が搔卷に包まり、小さくなつて転がつてゐた。彼は妻のこんな様子を見た事がなかつた。その変に惨めな感じが、胸を打つた。妻を自分はこんなに扱つてゐるのだらうか。妻がこんなに扱はれ

てみると感じてみるのだらうか。その感じが胸を打つた。（『山科の記憶』一、296頁）

「彼」は「妻」を愛し、大切に扱っていた。「妻」が大切にされている様子が、「彼」に満足感を与えていたらしいことも窺える。そして「妻」もそのことをよくわかっていた。それは、『痴情』の「妻」の手紙の中の、次のような言葉から知られる。

私はあなたに大切の人だと御申戴いて、こんなにひかんしてはもつたいないので御座いますが、（略）自分はあなたに大切にして戴き、何がおこつてもふわんの気持になる事ないので御座いますが、（『痴情』四、317頁）

「彼」が妻に対して大切の人だと言い、妻を大切に幸福な様子にしておこうとしているのである。

「さういふ者があつたからつて、お前に対する気持は少しも変りはない」
「只お前をその事で不幸にしなければいいのだ」
（『山科の記憶』一、297頁、298頁）

これらの発言には、妻を愛し幸福にしておくことが、夫としての当然の責務と考えていることが窺える。そのように、妻を愛し大切にする一方で、

明らかに自分が弱者の位置に立つ事が腹立たしくもあつた。
（『山科の記憶』一、295頁）

自分が女を念ひ断る事が出来ればそれに越した事はないが、それはいやだつた。妻に云はれて念ひ断るといふ事が既にいやなのだ。（『痴情』一、307頁）
「強迫するのか。そんな事で人の行為を封じようとするのは下等だぞ。」
（『痴情』二、310頁）

このように、「妻」に対して常に優位に立っていなければ満足できないのもあつた。「妻」を一個の人間として認めず、自分の意思通りに支配し従属させるべきものと捉えているのである。そして、「女」との関係についても、

「お前の知つた事ではないのだ。お前とは何も関係の無い事だ」
（山科の記憶一 297頁）

何ういふ事にでも、割に寛大になれる性質で、若しかしたら自分の此事にも寛大な気持を見せて呉れるかも知れぬといふ臆げな希望を彼は持つた事もあるが、
（山科の記憶一 298頁）

このように「妻」の心情を思いやることもなく、専横で自分のエゴイズムをむき出しにする、自己中心的で独りよがりな認識を持つのである。

そのような「彼」に対して、「妻」は、

「本統に貴方だけ想つて満足してゐるのに……」（『山科の記憶』二、299頁）
ほんとにほんとに信じて信じてゐて（『痴情』四手紙、317頁）

これらに見られるように、夫を信じ、その愛情に感謝し、夫に従属する関係を甘受していたのである。事件以前の「彼」と「妻」との関係はこのようなものであった。

『瑣事』の、汽車の中で出会った夫婦の挿話は、「彼」の理想とする夫婦像を具現するためのものと考えられる。

客車の中で見た女がお清とはかなり異つた態度でその年寄つた男に対してゐるのを彼は興味を持つて眺めて居た。女の気持は絶えず老人の気持を追つて居た。恰も忠実な飼犬がその主人から眼を離さないやうに絶えず何らかの注意を払つて居た。（略）若い細君が頻りに何か話しかけるのに老人は言葉少に応じながら、その眼で女をいたはつてみた。細君は良人としてよりも父として甘えるやうな気持を見せながら絶えず老人に注意してみた。見て、いぢらしい気がした。（『瑣事』、288頁—289頁）

若い細君が老人の気持を絶えず追っていたことに、「彼」は興味を持った。夫の気持を絶えず追うというのは、夫の気持に沿おうとすることで、夫がしたいこと、したくないことを漏らさず感知しようとすることである。この女の態度に興味を持ったのは、それが「彼」にとって好ましい妻の姿だったからに違いない。「彼」は女を「忠実な飼犬」に喩え、主人に細心の注意を払いながら、庇護者であるところの父に甘えるような様子であることを「いぢらしい」と見ている。ここに、唯一「夫婦」の語が用いられているのは偶然ではない。この「いぢらしい」若い細君に「彼」は、夫を信じ、その愛情に感謝し夫に従属する「彼」にとって望ましい妻の姿を重ねていたのであろう。

事件発覚以前の「彼」と「妻」の関係は以上のように確認できる。

Ⅳ. 「彼」の恋愛と「彼」

「彼」の恋愛、「彼」と「女」、祇園の仲居お清との関係はどのようなものであったのだろうか。

彼は一人でゐる時も、人とゐる時も頭から女を完全に離しきる事はなかつた。
（『痴情』三、315頁）

彼は二三日前からその人間に甚く会ひたくなつた。夜不図眼を覚す。直ぐその人間の事が頭に飛びついて来る。そして離れない。（『瑣事』、284頁）

このような激しい執着を持っている。しかし、その執着は次のように分析し説明される。

然し妻以外の女を愛するといふ事は彼では甚だ稀有な事であつた。そしてこの稀有だといふ事が強い魅力となつて、彼を惹きつけた。その事が自身の停滞した生活気分に関何か澁刺とした生気を与へて呉れるだらうといふやうな事が思はれるのだ。

(『山科の記憶』一、295頁)

女には彼の妻では疾の昔失はれた新鮮な果物の味があつた。それから子供の息吹と同じ匂ひのする息吹があつた。北国の海で捕れる蟹の鉢の中の肉があつた。これらが総て官能的な魅力だけだといふ点、下等な感じもするが、所謂放蕩を超え、絶えず惹かれる気持を感じてゐる以上、彼は猶且つ恋愛と思ふより仕方なかつた。そして彼はその内に美しさを感じ、醜い事も醜いとは感じなかつた。(『痴情』一、308頁)

「彼」は「女」に絶えず惹かれる気持を感じて、それは「恋愛」だと思ふが、自分の持つその恋愛感情の内に美しさを感じるのであり、妻以外の女にそのような恋愛感情を持つことが稀有で、その稀有だということが強い魅力となつて、「彼」を惹きつけて離さないのである。「彼」は自身の希有な恋愛感情に執着しているのである。

彼は自身が案外その女を愛してゐる事を感じ、愉快に思つた。(『瑣事』、287頁)
彼は彼女に会つたといふ事だけで至極満足してゐた。(略)我ながら可笑しい程快活な気分になつて、(『瑣事』、290頁-291頁)

このように、自分の恋愛感情を確認して、愉快に思つて満足し快活になるのである。『瑣事』は、そのような自分の恋愛の仕組みに気付いたことをテーマとしたと考えられる。このような恋愛感情をもたらす「女」に惹かれるのであるが、当の女自体については、次のように描写される。

女と云ふのは(略)精神的な何もをも持たぬ、男のやうな女だつた。
(『痴情』一、308頁)

好きなのは此方からだけだ、一さう思つてゐれば不服はなかつたが、先方も好きなのだと思へばお清では恐らく腹の立つ事ばかりだつた。(『晩秋』三、333頁)

このように、女が「妻」の存在に置き換わるような人間でないことは、はっきり認識されている。『瑣事』で、好ましい夫婦の姿が挿入された時、「いちらしい」若い細君について、ことさらに「お清とはかなり異なつた態度で」と添えたところにも、「女」に対する認識がはっきり表されている。つまり、お清は、「彼」にとって「自身の停滞した生活気分に関何か澁刺とした生気を与へて呉れるだらう」と期待する希有な恋愛をもたらす対象で、こちらから一方的に好きでいるのはいいが、相思相愛の間柄になることはいやな相手である。「彼」との関係性が生じる相手ではないのである。

そして、この恋愛の行方については、

彼は一人である時も、人とゐる時も頭から女を完全に離しきる事はなかつた。これが何かの意味で平穩に歸して呉れるまでは彼は女と別れる気にはなれなかつた。

(『痴情』三 315頁)

強い執着の一方で、「平穩に歸」ることを予期し、その後の『晩秋』では、さらに客観的に、次のように分析している。

それが郁子にとつて瑣事でない事はよく分つて居たが、今は遅かれ早かれ埒のあく問題だつたから、(略)自身の執着も風邪のやうに一通りの経過をとれば自然、元の状態に還るといふ風に考へるのであつた。彼にとつて真実なものは現在の自分の執着してゐる心持だけだつた。これは自分でも動かし難いものだつた。が、同時にそれも自然の経過をとれば(お清といふ女が对手の場合では)遅かれ早かれ平穩に還る事が分つてみると、

(『晩秋』二、326頁)

自分の側にある恋愛感情はいずれ冷めるもので、「女」はこの恋愛に関与していないのだから、自分だけが平穩にもどれば、この問題は終わる、「彼」はそう考えるのである。従つて「彼」は、「細君の哀訴の前に屈服」¹⁰⁾して「女」をあきらめたのではなく、「女」と実生活の選択を迫られて「実生活を守る道を選んだ」¹¹⁾のでもない。ただ自然の経過をとつていずれ平穩にもどるといふ、その分析通り、「彼」は平穩に還つていき、この恋愛は終結したのである。

さて、「彼」の恋愛は「一通りの経過をと」つて終結したが、そこに見られる「彼」の彼自身への処し方として、「自分の執着してゐる心持」は、「自分でも動かし難い」とする認識がある。それを作家は「真実」という重たい言葉で表現する。「女」と別れるために出かける朝、これからは浮気をしないように約束してくれと言う「妻」に、「それは分らない。ないつもの事が起つたんだから、今後とても請け合へない」(『痴情』二、311頁)と答える。『瑣事』公表の後もやはり、

「もう本統にこれからさう云ふ事ないやうに出来ないこと?」 / 「……………」 / 「返事がお出来にならないの?」 / 「うん出来ない」 (『晩秋』三、330頁)

返事ができないのではあるが、実は「さう云ふ事ないやうに」、つまり、浮気をしないと宣誓することができないと言うのである。自分の感情こそが唯一の真実で、自分自身にも動かし難く、まして、他人によって左右されることは許されず、「妻に云はれて念ひ断るといふ

10) 平野謙、前掲書、注1と同じ、153頁。

11) 国松昭、前掲書、注4と同じ、123頁。

事が既にいやなのだ」(『痴情』一、307頁)という態度は貫き通しているのである。

しかし、「妻」に執拗に言い張られて、「女」と別れ話をした後、次のようにいう。

表面は何も彼も、もう済んだ筈である。が、彼の心持は少しも片づいて居なかつた(略)自身には女と別れる気は全くなかつた。ない癖に妻の言葉通り何も彼も済まして来たのだ。彼は妻を欺く代りに仮りに自分を欺いてゐる。自分を欺いてゐないとすれば、そんな風にして再び妻を欺き、女をも欺いたのだ。何れにもせよ、彼には家庭の調子を全く破壊してまで正面から此事に当らうといふ気はなかつた。それに値する事柄とは思はなかつた。

(『痴情』三、314頁—315頁)

「彼」は自分の感情を殺さないという意味で自我を貫いた。が、そのために自分を欺いて女と表面上別れたのである。その意味で、高田瑞穂の「結局思い通りの行為をやり通した」という理解は、首肯すべき方向性は持っているものの、正確でない。

ここに「家庭の調子」というキーワードが現れる。「女」に惹かれる気持ちがある間は、自我を貫いてその感情に従うし、そのために「妻」や「女」、そして自分を欺くことは好ましいことではないと思うが、それらよりも「家庭の調子」を守る方が大事だという価値観が「彼」の根底にあるのである。この価値観は、『山科の記憶』冒頭の「彼は妻を愛した。他の女を愛し始めても、妻に対する愛情は変らなかつた」に通底するものであろう。この事件を通して再認識した、あるいは、認識を強くしたということが考えられる。

V. 「妻」の変容と「彼」

かつて「妻」は、夫に愛され、大切にされて、その愛情に感謝し、その夫を信じて従属物であることを甘受する従順な妻であった。

何ういふ事にでも、割に寛大になれる性質で、若しかしたら自分の此事にも寛大な気持ちを見せて呉れるかも知れぬといふ臆げな希望を彼は持った事もあるが、

(『山科の記憶』一、298頁)

「彼」に、このようなひとりよがりの考えを抱かせるほどであった。しかし、恋愛に関しては「他の事はそれでもいいけど、一此方で堪へるからいいけど、一その事だけは此方で堪へてゐるといふわけに行かない事ですからね。」(『晩秋』三、330頁)と「妻」は言う。

妻はどうしても女と別れる事を彼に断言さず迄は執拗に我を張つた。妻の強いのは此事だけだ。

(『山科の記憶』三、303頁)

この出来事は、かつての「妻」でない「妻」を引き出すことになった。

妻は一生懸命だつた。日頃少しも強く光らない眼が光り、彼の眼を真正面に見凝めた。

(『山科の記憶』一、297頁)

何れにしろ、形式的にも一時別れるより仕方ないと決心したが、妻が金で済む事だと云ひ、彼には嫌味に、女に対しては軽蔑を示したのが、一寸腹に据ゑかねた。(略)然しその云ひ草が日頃の妻らしくないと彼は腹を立てたのだ。(『痴情』一、308頁)

このように、〈日頃の妻〉と違う「妻」の姿が再三描写される。「彼」を強い視線で直視して、「彼」に対しては批判的な自分の考え、意志をはっきり口にするのは、これまでなかったことなのだ。

彼は口から出るまま、毒のある言葉を吐いた。/妻は顔色を変へ、凝つと彼を見てゐたが仕舞に其眼を落すと、(略)「初から勝手は分つてゐるけれど、御自分が散々人をだまして置いて、それが分つたからつて、強迫するだの、下等だの、よく平気でそんな事が仰有れるわね。(略)子供が嘘を云つたりすると、厳格過ぎる程お叱りになる方が、御自分の嘘はさう気にならないと見えるのね。」/「本統を云つてよければ(略)お前がそれに堪へられるなら何時でも本統を云つてやる」/「貴方は自棄になつていらつしやるの?お変りになつたものね」(『痴情』二、310頁—311頁)

こうした、「彼」への非難を含む激しいやりとりは、これまでなかったことなのだろう。恋愛事件によって「妻」が、自分の意志をはっきりと持って自己主張する、一個の自立した人間として立ち現れたのである。「妻」の変容である。

ただ、妻も強くなって我を張るようになっただけではない。〈山科もの〉の内に、「妻」が「彼」に浮気をしないように約束してほしいと迫るところが2度あり、いずれも誓約できないと「彼」は返答する。1度目の『痴情』三では、

妻は急に亢奮して叫んだ。/「それおやあ私、生きてゐられない」

(『痴情』三、311頁)

と、ヒステリックに反応したが、2度目の『晩秋』三では、

「いやな方ねえ」郁子は不愉快さうな顔をして黙つて了つた。(『晩秋』三、331頁)

と、冷静な受け答えをしている。

或時は又こんな風に云ふ。「つまり家庭の病気みたやうなものね。直ればもう何にも残らな

いわね。……だけど、此病気の方が余つぽど寿命が縮まりますよ」 / 「病気と云ふ以上、又かからないとは限らない」彼は笑談にして答へる。この方が寧ろ云ひよかつた。
(『痴情』四、316頁)

これは、「彼」の浮気を「家庭の病気」と喩えるのだが、「家庭の」と言うところに、このことが「彼」一人の問題ではなく家庭の問題なのだという「妻」の基本的な考え方が示されている。しかし、病気の喩は再発する可能性があることを含んだものであるはずで、浮気を容認するのではないが、夫への妥協が窺える。自立した人間として自己主張を持ち始めた「妻」であるが、その必然として、異なる主張を持つ人間との妥協を迫られ、ある諦観を持つに至ったのである。夫の浮気を「家庭の病気」と捉えるに至った「妻」は、「絶えず幾らか亢奮して居た。いつもめり込むやうに見えて居た蒲鉾型の指輪が手を下げると自然に指から抜け落ちたり」(『痴情』四、316頁)する状態であった。おそらくは、「何がおこってもふわんの気持になる事ない」(『痴情』四、317頁)、悲観などは知らない、かつての幸福に安住していることはできなくなったであろう。「妻」の側からも、「妻の夫に対する完全な勝利」¹²⁾と、無邪気に言えるものではなかったのである。

このような「妻」の変容に、「彼」はどう応じたのであろうか。「彼」が、自分の感情を殺さないという意味で自我を貫いたことは前項で述べた。そして、「彼」の変化を明瞭に説明するような叙述はない。しかし、いくつかの点から「彼」の変化を読み取ることができると思う。

まず、〈不愉快〉とか〈腹を立てる〉という表現の対象である。

それは口惜しい笑ひを含んだ眼だつた。／彼は何も彼も、もうわかつたと思つた。彼は興奮した。腹が立つた。
(『山科の記憶』一、296頁)

然しその云ひ草が日頃の妻らしくないと彼は腹を立てたのだ。妻は裏切られ、欺かれたと云ふ事で心が一杯なのだといふ事はよく分かつてゐたが、彼はそれで我慢する気にはなれなかつた。
(『痴情』一、308頁)

妻の言葉は妻として必ずしも誇張とのみ云へない事は知つてゐたが、彼は矢張り腹を立てた。
(『痴情』二、310頁)

「貴方は自棄になつていらつしやるの？お変りになつたものね」／彼は不愉快で仕方がなかつた。もう口をきくのがいやだつた。
(『痴情』二、311頁)

「妻」の登場しない『瑣事』にはないが、『山科の記憶』・『痴情』には上に引用したように、「彼」に反発し非難する「妻」に対して、「彼」が腹を立てて不愉快になり、苛々する場面が幾度となく見られる。ところが、『晩秋』にはそのような場面はない。逆に、郁子の方が、浮気をしないと約束できない「彼」に対して「不愉快さうな顔」を見

12) 中村光夫、前掲書、注2と同じ、181頁。

せ、夫の裏切りを郁子に知らせてきた昔の女弟子の思慮の無さを「不愉快がつて」いるのである。さらに「彼」に、自分自身について「一種の暴君で自分でも不愉快なんだ」（『晩秋』三、330頁）と言わせている。こうしたところに、自立した一個の人間へと変容していく妻を受容していく、彼の変化を暗示する作家の意図を読むことができる。

また、『晩秋』では、それまでの3作品で「妻」とされていた呼称が、一貫して「郁子」となっている。妻というのは夫である人物との関係性を示す言葉で、夫との関係においてのみ存在しうる、ある意味で人格を持たないものである。この「妻」から「郁子」への呼称の変更は、「妻」が一人の女性として、主体性をもった人間として「彼」の中で認識され始めたことを表そうとするものであろう。

志賀の短篇においては、挿入されたエピソードが主題に深く関わっていると考えられるが、『晩秋』最終章に、唐突に土産と思われる千枚漬のエピソードが挿入されている。

「千枚漬はどうした？」 / 「お浪さんの所へ取つて貰ひました」 / 「七つあるね」 / 「六つき取り取れませんよ」 / 「七つなければ足りないだらう」 / 「四円のを入れたから、一つ減らして丁度いいでせう」 / 「まあいいや。何か他の物を廻せばいい」 / 「こんな事でも彼は自分の思惑と違ふと却々我慢しない方だつたが、今は愚図々々云ふ気になれなかつた。

（『晩秋』四、334頁）

以前は、こうした土産物についても、自分の思い通りでなければ承知できなかった「彼」が、「妻」の差配に「まあいいや」と妥協する。「彼」の変化を端的に示すための挿話と考えられる。土産物の数という些細なことであるが、一家としての判断を行う新しい「妻」を受け入れていく「彼」の姿を表すと見ることができる。

このように辿ってくると、「妻」の変容を受容していく「彼」という作品の構図を、かなりはっきりと認めることができる。「彼」と「妻」との関係性も、自然、変容を遂げているはずである。これが、作家の意図した〈此事の家庭への反映〉に他ならない。

京都を出た汽車の中での、次のようなやりとりで〈山科もの〉は閉じられる。

「何故そんな弱つた顔をしてゐるんだ」 / 「もう、すっかり疲れたの」 / 「不愉快を感じるやうな事は何にもないからね」 / 「ええ、それはいいんですけど、浪が心配して色々いつて呉れるんで、(略)親切で云つて呉れるんだから、大変ありがたいんですけど、二人だけの事にさう他人に入られると何だか恥のやうでいやでせう？」 / 「うむ」 / 「(略)二時間が三時間だつたけど、今日は何だか、すっかり疲れちまひましたわ」 / 「もう、それでいいや。」

（『晩秋』四、335頁－336頁）

まず「妻」が「それはいいんですけど」と言うのは、「彼」が先刻、「女」と逢つたことについてである。これは、「彼」の言葉を信じるということであり、後の「彼」の「もう、それでいいや。」は、「妻」の気苦労をねぎらうものである。これは「二人だけの事」、す

なわち、家庭に、主体性をもった人間同士として信じ、いたわる関係を構築したことを示している。続いて、今度の出来事について「私お母様ならお話してもいいけど」と言う「妻」に対して、「彼」が「馬鹿。そんな事、云ふ必要はない」と応じるのは、かつての理解者「母」に訴えなくても、今は自分に言えばいい、という「彼」の、「妻」の理解者たらしとする意識の表明と考えられるのである。

VI. まとめ

<山科もの>と通称される『瑣事』・『山科の記憶』・『痴情』・『晩秋』の4作品について、志賀自身が『続創作余談』で述べた「此事が如何に家庭に反映したか」に着目して作品世界を具体的に読み解いてきた。

この発言の「家庭」は、夫である「彼」と「妻」との関係を主軸に構成される家族関係の総体と考えられる。「彼」は「妻」を愛し大切に幸せにしておくこと、家庭を守ることを夫の責務と考えるが、「妻」を一個の人間として認めず、「妻」に対して優位に立ち自分の意思通りに従属させるものと捉えていた。かつては「妻」も、夫を信じ愛情に感謝し従順で、夫のエゴを甘受していた。「彼」は自分の恋愛について、自然に冷めるまでは感情を殺さないという意味で自我を貫いたのであったが、従順であった「妻」がこのことには強く反発し別れることを強要して、辛抱の極致に追い詰められる。このような「妻」の姿に「彼」は「家庭の調子」、つまり「彼」と「妻」の関係の大切さを再認識する。そして、この事件によって、「妻」は主体性を持った一個の自立した人間として自己主張を始める。この「妻」の変容は、おのずと「彼」にも変化をもたらし、「妻」を一個の人間として認識し、そのような「妻」の理解者であろうとする「彼」の姿が確認されたのである。

<山科もの>以前の志賀文学の特質である、夫である男の自己中心的なエゴイズムの言動と自己主張を持たない従順な妻という構図が<山科もの>で変化を見せ、その流れが以降の作品に深くつながっていくと考えられる。そのような意味でこの<山科もの>は志賀の作品のなかで注目すべき作品群である。

【参考文献】

- ・ 国松昭 「「山科」ものについて」、『一冊の講座 志賀直哉』、有精堂、1982.10、113頁－124頁。
- ・ 『志賀直哉全集』第3巻、岩波書店、1973、283-336頁。
- ・ 『志賀直哉全集』第8巻、岩波書店、1974、22頁。
- ・ 高田瑞穂 「「山科の記憶」一系の作品」、「国語と国文学」第48上、1971.6、1頁－13頁。
- ・ 中村智 「志賀直哉「山科もの」論」、「山口国文」第18号、1995.3、21頁－32頁。
- ・ 中村光夫 「山科の記憶」、『志賀直哉論』、文芸春秋新社、1954.4、150頁－187頁。
- ・ 平野謙 「私小説の二律背反」、『平野謙全集 第二巻』所収、新潮社、1975.2、143頁－163頁。

要 旨

<山科もの>と通称される『瑣事』・『山科の記憶』・『痴情』・『晩秋』の4作品を、『続創作余談』の「此事が如何に家庭に反映したか」に着目して作品を具体的に読み解いた。

この「家庭」は、「彼」と「妻」との関係を主軸に構成される家族関係の総体と考えられる。「彼」は「妻」を愛し幸せにしておくこと、家庭を守ることを夫の責務と考えるが、「妻」を一個の人間として認めず、「妻」に対して優位に立ち自分の意思通りに従属させるものと捉えていた。かつては「妻」も、夫を信じ愛情に感謝し従順で、夫のエゴを甘受していた。「彼」は自分の恋愛について、感情を殺さないという意味で自我を貫いたのであったが、従順であった「妻」がこのことにだけは強く反発し別れることを強要して、辛抱の極致に追い詰められる。このような「妻」の姿に「彼」は、「彼」と「妻」の関係の大切さを再認識する。この事件によって、「妻」は主体性を持った一個の自立した人間として自己主張をし始める。この「妻」の変容は、おのずと「彼」にも変化をもたらし、「妻」を一個の人間として認識し、そのような「妻」の理解者であろうとする「彼」の姿が確認されたのである。

<山科もの>以前の志賀文学の特質である、夫の自己中心的なエゴイズムの言動と自己主張を持たない従順な妻という構図が<山科もの>で変化を見せ、その流れは以降の作品に深くつながっていくと考えられる。

キーワード：志賀直哉 山科もの 『瑣事』 『山科の記憶』
『痴情』 『晩秋』 私小説

투 고 : 2008. 2. 29
1차 심사 : 2008. 3. 15
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : 306-791)대전광역시 대덕구 오정동133 한남대학교 일어일문학과
電 話 : 042-629-7937
e-mail : bibi-06@hotmail.com/m_bmokuren@hanmail.net